

今は、中国に残してきた娘二人も、家族を連れて私のもとに来て、男の子もそれぞれ中国から嫁を迎えて何とか生活をしている。一族三十人を数えるようになった。昔の生活を思えば夢のような平和な毎日である。私の気性も穏やかになり、好好婆となった。

父が生きていれば、また違った半生となったかもしれないが、戦争の悲哀をともに受けた家族のそれぞれの運命、だれを恨むわけにもいかないだろう。こんなことは、もう二度とないだろうし、あつてはならないことだ。

筆架山開拓団第五部落の人々の冥福を静かに祈りながら、一開拓民の父と子が、あの戦争によってどんな運命をたどったかを残したく、書いた次第である。

花模様の着物と赤い足袋の悲劇

埼玉県 大島 一 恵

一 はじめに

私は、明治四十三年一月に生まれました。随分年をとったので、昔のことはだんだんと記憶が薄れて忘れつつありますが、あの終戦のときから引き揚げるまでの苦難は、忘れろと言われても忘れられるものではありません。

あんなに悲しい事、恐ろしい事、情けない事は、二度と経験したくはないし、他の人々にも経験させてはならないことです。その願いを込めて、思い出すままに書き綴りました。

二 避難命令を受けて

昭和二十年八月十四日、突然のソ連軍の侵攻により、ここ晨明開拓団にも避難命令がきました。

その年の七月になって、開拓団の若い団員にも次々

と召集令状が来て、軍隊に行ってしまいました。残っていた団長をはじめとして、学校の先生、それに年配の団員など九人にも、八月九日にはとうとう召集があり、哈爾浜の部隊へと出発してしまいました。

後は、老人と女と子供だけになってしまいました。が、みんなで力を合わせて「銃後の守りは、私たちの務め」と言って、農作業に家事にと精を出していましたが、これから起きるであろう難行苦行などだれもあまり深刻には考えていませんでした。

前日の十三日に、「事態の切迫により、ここから一時避難するので、準備をするように」との本部からの指示があつて、みんなはてんやわんやの大騒ぎで、混乱して何も手につかずに気ばかり焦って、忙しい思いをしていました。

そんな最中に、朝鮮人部落から代表者らしい二、三人の朝鮮開拓団員が本部に駆け込んできました。先生のお母さんが、付け髭をした変装姿で、「何だね!」と言って対応してくれました。朝鮮の人たちが言うことには、「この開拓団の本部には、鉄砲が三十丁あ

るはずだ。それを我々に渡してもらいたい」ということでした。みんなで相談した結果、「老人、女、子供だけの今の開拓団の状態では、鉄砲など持っていない使えないし、かえって避難するのに邪魔になるから」と渡すことにしました。朝鮮の人たちは大喜びで持つていきましたが、その後、その人たちは私たちに対しては、乱暴なことにはませんでした。

みんなは、それぞれ避難するための準備をしました。和田さんのところは、子供が十二歳を頭に、一歳の末子まで五人いるし、私のところも十二歳を頭に四人の末子まで四人の子供がいました。ほかの団員の四人の若い奥さんたちにも、一人ずつ四人の赤ちゃんがいました。

大きい子供たちは、学校の用具と、その他にそれぞれ自分たちに必要な物を持ち、私は米、味噌など当座の食糧、それに鍋、湯沸かしなど、生活上どうしても必要な道具、そしてこれから冬に向かうために、冬越しに必要な衣類などを持つことにしました。私も子供たちも、持てるだけの物を持ちました。昔、芝居で見

た「淡島様」の様な格好でした。休中に隙間のないほどいろいろな物をぶら下げました。ほかの人たちも、みんな同じ格好をしていて、顔を見合わせて笑ったものでした。今日まで考えてもみなかったような、哀れな姿となりました。

晨明開拓団とは、満州国三江省湯原県晨明に所在していた、少年義勇隊の大先輩格である饒河少年隊の第三次生が入植した開拓団です。入植は昭和十五年五月ごろだったと思います。入植以来、少年義勇隊の皆さんは、暑いときも寒いときも、気候に負けずに、苦勞に苦勞を重ねてようやく開拓が軌道に乗り、田畑の農作物はもとより、家畜も大幅にふやして経営も順調になり、やっと苦勞が報われてきて、これからが大いに楽しみな開拓団でした。本当に、豊かで平和な住みよいところで、だれもがここに入植してよかったと思っ
ていましたし、第二の故郷にふさわしいところと考えていました。

ところが、この戦争によって状況は一変してしまいました。桃源郷は、一夜にして悲劇の場所となりました

た。

収穫寸前の農作物や、たくさんふえた家畜、営々として築きあげてきた我が家、思い出いっぱいの家財道具などを全部置いて、ここを去らなければならないかと思うと、本当に悔しくて情けなくて、腹の立つ思いでいっぱいでした。一時避難なので、関東軍が遊撃してソ連軍を追い払ってしまえば、すぐに戻れるという話が、唯一の慰めの言葉であり希望でありました。命あつての物種と思ひ直して、悔し涙を流しつつ準備をしました。

翌日、十四日の未明に晨明を出発しました。私たちの一団は総員で三十三人だったと思いますが、五十歳を越した男が三人と、八十歳のおばあさん一人と、それに小さい子供が十四人ぐらいで、あとが女でした。みんな元気で出発したことはなよりでした。

開拓団本部のある場所と晨明駅との間には、タワン河という松花江の三分の一ぐらいの河幅の河がありました。その河には橋が架かっていなかったのです。濁った水は、渦を巻いてとうとうとして流れていまし

たが、ここを渡らないと前に進めません。渡る手段はただ一つ、ワイヤでつないだ渡し舟があるのみです。

しかし、渡し守は私たちの今の境遇を知ったのか、冷淡な態度をとって、舟を出そうとしないのです。私たちはやむを得ずに、出征している団員の人たちのためにと持ってきた、買い置きシャツやズボンなどを渡し、話し合いをしてようやく舟を出してもらおうことになりました。

駅に向かって歩いている途中には、出征して行った団員が丹精を込めて作った田や畑があり、歩きながらいろいろなことが、走馬灯の如くに頭の中をよぎっていききました。もうそろそろ収穫する時期であったので、稲はよく実り、黄色い穂を垂らしています。今年も豊作だったのと思うと、それだけでも無念さが込み上げてきます。思い始めると残してきた馬や牛などはどうしているか、そのままにできた家や家財道具はどうなったか、荒らされてはいないかなどと、次から次と思い出されて、無念さが止まりませんでした。帰ってきたときに無事にあるだろうか、無事であった

もらいたいと念ずるばかりでした。

頭の中ではそんなことを思いながら、足の方はみんなに遅れないようにと、子供の手を引きながら一生懸命に歩き続けました。

十四日の昼近くになって、ようやく駅に着きました。列車を待ちましたが、どの列車も奥地からの避難者で満員で通過してしまいました。

そのころになるともう貨物列車ばかりになりましたが、それでも避難者でいっぱい、あふれるようでした。

やっと無蓋車の列車が到着しましたが、やはり避難者でいっぱいでした。そのうえに、あいにく雨が降り出してきました。雨足は強く、無蓋車ですので、雨水が底にたまり、座るわけにもいかず立ったままでいました。しかし、雨はだんだんと激しくなり、かぶる物もなく、連れた子供や背中におぶった赤ん坊などが、今にも殺されるのではないかと思うように泣き叫び出しました。

立ったままで、身動きもままならない状態でした

し、雨も止みそうもないので、その列車に乗っていることをあきらめて、私たち晨明開拓団の一団は下車することにしました。この次の列車がいつ来るのか、全然分かりませんが、致し方ありませんでした。

その夜は、晨明駅の近くの第五部落に泊まることとなりました。これがみんなと一緒にいられる最後の夜だということで、有り合わせの食糧を出し合って、夕食を作りました。みんなは、別れを惜しむ気持ちで過ぎました。

晨明開拓団には、本部、第一部落、第二部落、第三部落、第四部落、第五部落、牧場部落の七つの集落がありました。そのうち、第四部落と第五部落が駅の近くにあり、他の部落はタワン河の向こう側にあつたのです。

翌日は天気もよくなりました。幸いに避難列車は何とか動いていましたが、やはり満員で、ほとんど晨明駅は通過していききました。

夕方になって、これが最後だという貨物列車が停車しました。ようやくこれに全員が乗ることができて、

みんなはホッと安堵しました。

昨夜と違って夜は暗れて、満天に降るような星空でした。しばらくは、今までの苦しかった事を忘れて、空を見上げていました。その時、金属音を響かせて飛行機が飛んできました。「あつ、ソ連の飛行機だ！」と叫んだとたんに「ぼりぼり！」というものすごい音がしました。飛行機からの銃撃だと思い、みんなは頭を抱えて、首を引っ込めて床にへばりつきました。しばらくは生きた心地がしませんでした。

そのうちに、だれかが「貨車の上に真横に渡していた板木が出過ぎていて、電柱にぶつかつたんだ」と言うので、みんなはほっと安心しました。

三 綏化から新京への避難の旅

苦しかった貨物列車での旅も、やっと綏化の駅に着いて解放されました。綏化の駅で、私たちはすぐに炊事にとりかかりました。持ってきた鍋で米を洗い、薪を拾い集めて炊飯をして、駅前の広場で食べました。

綏化の婦人会では、トウモロコシ粉とメリケン粉とを混ぜて、たくさんのマントウを作つて、大勢の避難者

に接待をしてくださいましたが、残念なことに、四十七度近い暑さの炎天下のことで、すぐに腐りかけてしまい食べられなくて申し訳ないことをしました。みんなは、せっかく苦勞して作ってくださった婦人会の人々には、心からの感謝をしたものです。

八月九日に、根こそぎ動員で哈爾濱の部隊に入隊した団の人たち九人は、入隊予定の部隊が急に移動したために入隊できずにいたところ、終戦となったことを知り、団に帰ろうとしていたそうです。しかし、家族はみんな綏化に移ったことを知り、急いで綏化に向かって出発し、午後になって私たちと合流することができて、お互いにほっとしたものでした。

頼りになる人たちが九人も一緒に、元氣な顔を見せたので、みんなは安心して喜んだものでした。

避難者は、綏化の飛行場に収容するということで、私たちが世話人の指示に従い、綏化の駅を歩いて出発しました。

はるか彼方に、格納庫の屋根がかすんで見えてきました。小石混じりの道を延々と長蛇のごとくに、老

いも若きも、女も子供も、持てるだけの荷物を持って、炎天下を汗とほこりで真っ黒に汚れながら歩いて行きました。やっと飛行場に着いたのは、もう夕方だったと思います。飛行場には既に、何千人かはっきり分からないくらいに避難者がいました。団長は、八十歳の団員の母親をおぶって歩いていました。

綏化飛行場には格納庫が数十棟もあり、私たち避難者は、その格納庫に収容されましたが、ベニヤ板で造った飛行機が格納庫の中にたくさん入っていました。

一つの格納庫に二百人以上が収容されましたが、みんなはベニヤの飛行機を壊して休む場所を作りました。

私たち家族も残った翼を利用することにして、翼の上にあがって横になりましたが、翼にはいくら傾斜があつたので、眠っている間にずり落ちることがありましたが、いつのまにか慣れてしまいました。

それから私たち開拓団だけの生活が始まりました。団員のだけれが、大きな中華鍋を近くの農家から買ってきて、毎日四十人分ぐらいのご飯を炊き出していました。

滑走路には大きな市場ができていて、何でも売って
いました。梅干し入りの握り飯があつたり、味噌汁が
あつたり、時には野菜の油炒めなども作って売ってい
ました。もちろん私たちも食べましたので、おかげで
何とか栄養はとることができました。格納庫の地面は
コンクリート敷きなので、雨が降ると湿気がこもり、
いつまでも乾かないので、避難者は体が冷え込んで、
お腹をこわしたり、下痢に悩まされて生気のない顔を
している人が多くなりました。老人や、幼い子供たち
が、次々と死んでいきました。

私たちが収容されたときには、その飛行場にはまだ
日本の兵隊さんが三十人ぐらい残っていて、私たち避
難者は、米、味噌、砂糖などを分けてもらい、本当に
嬉しく感謝していました。

緩化に収容されてどれぐらいたったかよく覚えてい
ませんが、ある日、ソ連軍が飛行場に進駐してしまし
た。私たちの目の前で、残留の日本兵三十人が滑走路
に並ばされて、武装解除をされているのを見たときに
は、何とも言い表せない悔しさと不安感が脳裏にひろ

がりました。みんな四十歳前後の人たちばかりで、滑
走路に座らされて点呼をとられたり、武器を渡したり
していて、そのうちにトラックに乗せられました。

その時、ソ連軍のほうで女の人を五、六人連れて行
くと言い出しました。私たちは、兵隊さんを見送るた
めに集まっていたので大騒ぎとなりましたが、そのう
ちに数人の女の人たちが自分から申し出て、みんなの
身代わりになって連れていかれました。避難者の女の
人たちみんなは手を合わせて感謝し、見送りました。

兵隊さんと私たちの犠牲となった女の人たちは、ト
ラックに乗せられました。行く人、見送る人、それぞ
れ手を振り振り、別れました。万感胸に迫る悲しい場
面でした。

そのうちにだんだんと食糧事情が悪くなってしまし
たし、さらには飲料水にも事欠くような生活になっ
てきました。そして、幼い子供たちが、次から次と病
気にかかり亡くなっていき、いつしか悲しみや、喜びの
感情を忘れたような人間ばかりになりつつありまし
た。

無表情な母親たち、何ということなく、ただ手をこまねいているばかりで、何もしてやれない虚しさばかりが残る日々を過ごしていました。こんな思いは、もう絶対したくありません。また、すべきではないと思います。経験した者にしか分からないことでしょう。

緩化の飛行場で避難生活を始めてから一カ月ぐらいたった後に、次の避難場所となる新京に移動することとなりました。出発の日は曇りで、薄ら寒い日でした。人家も何もない野っ原のような所で、みんなは貨車に乗せられました。幸いにも有蓋車でしたが、無蓋車に乗せられた人たちもたくさんいました。確か、九月十七日に出発して、二十一日の朝に新京に着いたと記憶しています。この四日間の移動は、いろいろと苦しく、かつ惨めな思いばかりの旅でした。

一日に幾度となく、貨車を止めてはソ連兵が入ってきて「時計を出せ、万年筆を出せ」と、銃を構えて脅かしながら乗り込んできました。話によると、これらのソ連兵は、ついこの間まで監獄に入っていた囚人兵らしく、凶暴のかぎりをつくしていたようです。

銃を構えられたら、否応なしに持っている物を差し出しました。夜中でも構わずに、列車が止まると必ず侵入してくるので、心の休まる時はありませんでした。

ある貨車ではソ連兵による女狩りがあり、女性とみると手当たり次第に、車外に引きずりおろして乱暴をしたそうです。みんなは、成す術もなく息を殺して車内にうつ伏していたそうです。

緩化を出て四日目になると、もう何も出す物は無くなってきました。ソ連兵が来たらどうしようと、みんなは心配になってきました。でも、今は列車が止まらずに走っているから大丈夫、もうすぐ新京に着くからと言われてほっとしていました。しかし、そう言われているときに、見渡す限りの草原のど真ん中で列車が止まってしまい、ソ連兵が入って来ました。ソ連兵は銃を構え、団長をはじめ男の団員を全部外に出して、一列に並べて手を上にあげさせて身動きをできなくしてから、車内に残っていた私たちに「時計を出せ、もし出さなければ、この男たちを撃ち殺す！」と叫びま

した。私たちは困ってしまい、「だれか持っている人がいたら出してください！」と頼みましたが、もうみんな取られてだれも持っている人はいませんでした。

その時、団員の父親の山川さんが、自分の荷物の中から「オルガン時計」を出して、ねじを巻きました。するとそのオルガン時計が「汽笛一声新橋を……」というメロディーを奏ではじめました。ソ連兵はびっくりしていましたが、そのうちに大喜びして、男たちを解放し車内に入れました。ソ連兵はそのオルガン時計を大事そうに持って去って行きました。列車は、また走り出しました。

緩化を出発するころから、十歳ぐらいから下の子供たちの間に、悪性のハシカがはやり始めました。

そのうちに死者が出るようになりました。団員の三歳の女の子が死んだので、その母親が、その子に晴れ着を着せて、列車が止まったときに線路の脇の畑のすみに埋めました。それを見ていた満人が、すぐに来て死体を掘り出し、晴れ着をはぎ取ってしまい、裸のままその穴に放り込んで行ってしまいました。それを貨

車から見えていた親をはじめとして私たちも、ただ見ているだけでどうすることもできませんでした。

このつらさ、悲しさ、悔しさは、その場面を見た人にか分らないことです。

貨車の中で、和田まき子ちゃんという四歳の女の子も亡くなりましたが、どこだったかよく分からない名も無いような駅の、ごみ捨て場に埋められました。みんなは悲しい思いでいっぱいでしたが、涙もかかれて出ませんでした。

私の末の子の、芳子（四歳）もハシカにかかってしまいました。高熱が出て苦しそうでしたが、座ったままで横になることもできない貨車の中では思うような看病もできず、熱を冷ますこともままならないので、病状は進むままで、どうしようもありませんでした。

明日は新京に着くという二十日の晩に、臨月だった先生の奥さんが産気づき、先生のお母さんが、かわいい女の子を無事に取りあげました。みんなは、心配したり喜んだりでした。暗い、悲しい、悔しいことはかりの連続だった私たちの毎日のなかで、久しぶりに明

るい、嬉しい出来事でした。あんな身動きもできないような貨車の中で、無事に出産できたという事は並大抵のことではなく、生命力の強さをしみじみと感じました。しかし、奥さんもお母さんもどんなに大変だったろうと思いましたが、でも、母子ともに元気で、「おめでとう」とみんなで叫びました。

二十一日の朝、私たちはようやく新京駅に着き、貨車の扉が広々と開けられて、みんなは深呼吸をして新鮮な空気を胸いっぱい吸ったものです。

貨車の止まったところは、ホームではなく引き込み線のような場所でした。貨車と地面との間が高すぎて、荷物を持って降りるのが無理だったので、娘の着替えを入れた包みを先に降ろしたとたんに、貨車の反対側にいたソ連兵が待ち構えていて、太い針金の先を曲げた物で、降ろした荷物を引っ掛けて、反対側に引きずって取ってしまいました。

長女の下着や着替え一切を取られてしまったのです。ほかの人たちも同じような手口で大切な品物を取られてしまいました。「これからの寒い冬を越すのに

必要な物ばかりだから、どうか返してください」と、みんなで何度も何度も頼んだのですが、知らぬふりをしてとうとう返してもらえませんでした。それから、みんなで警戒を合せて、先に降りてから荷物を受け取ることにしました。残った大切な荷物をもう絶対に取られないようにと、お互いに注意をしました。

昨晚お産をした先生の奥さんは、生まれたばかりの赤ちゃんを背負い、ねんねを着て、自分で荷物を持ち、普通の人のように貨車から降りてこられて、私たちはびっくりしたり、安心したりしました。先生の奥さんの、若いのに気丈夫なことには敬服をしました。

四 新京での難民生活

新京に着いた私たちは、ソ連兵に荷物を取られないように、日本人会の幹部の人に守られながら、どこに行くのか分からないままに歩きました。新京市内の様子をよく分かっている日本人会の人に、そばについてもらったので、ソ連兵から狙われることもなく、無事に新京神社に集合しました。

そこで、日本人会で準備した折り詰め「巻き寿司

弁当」をごちそうになりました。とてもおいしくて、お腹の虫が嬉し泣きをしたような思いでした。みんなも同じ思いだったことでしょう。豆やトウモロコシの「ぼくだん」ばかりで、ほかには何も食べる物もなく、水さえも飲めない生活だったので、みんなはお腹を満たしてホッと安堵しました。

しかし、ハシカにかかった子供たちは四十度もの高熱でうなっており、真っ赤になった発疹が体中に出て、広い新京神社の境内を、ごろごろと転げ回り苦しんでいました。私たち大人はただおろおろするばかりで、どうしようもありませんでした。飲ませる薬はもちろん、痛みを止める注射薬なども全然なく、この大勢いる避難者の中には、医者もいないようでした。ハシカの治療には絶対安静が一番必要なのに、安静どころか寝かせる場所もなく、ただおろおろとして見守っているほかはどうすることもできない、つらい思いでした。

九月になると、寒さがだんだんと厳しくなってきました。満洲の気候は、夏が過ぎると秋がほとんどな

く、すぐに冬になります。

このままこうしていてもどうしようもないので、新京神社を出ることになりました。ハシカの子供たちは抱きかかえ、大きい子供は、子供同士で手をつないで行きました。二時間ぐらいかかって、新京飛行場脇にあった満鉄社宅に着きました。ここが私たちの取りあえずの避難場所です、よいところのような気がして安心しました。この満鉄社宅は、新京市西陽区千早町にありました。社宅通りには大きなプラタナスの街路樹があり、もう葉が落ちて丸坊主になっていました。

私たち晨明開拓団の家族が収容されたのは、社宅街の中の一軒の社宅の二階でした。部屋は三室あって、和田、宮脇、山川の三家族十三人は十畳の部屋に、宮田先生の家族は四畳半の部屋に、山田団長の家族六人は六畳の部屋にそれぞれ割り当てられました。各部屋とも畳はあちこち無くなっていました。みんなは、何とか寝起きができるようにいろいろと工夫を凝らして、落ち着くこととしました。

社宅の前に広い道路があり、それを挟んで広場があ

って、その先は飛行場になっていました。遙か彼方には、ソ連軍の爆撃で焼け落ちたと思われる格納庫の残骸が、まるで恐竜のように空に向かってそびえており、遠くには農家の屋根がかすんで見えているようなところでした。各社宅は同じ間取りのようで、道を挟んで同じような建物が何列も建っていました。

しかし、ここでもソ連兵の悪質な行動は変わりません。若い婦女子は坊主頭にしましたが、四十を超えたおばさんたちは、どうしても坊主頭になるのがいやでそのままにしている人もいました。

夜八時ごろになると、二、三人のソ連兵が組んで、土足で踏み込んできます。ある夜、山川のおばさんは、長い髪の毛を畳の所まで出して、顔を隠して寝ていたところにソ連兵が踏み込んできて、電気をパッと消し、おばさんの両手をつかんで引きずり出したので、娘の秀ちゃんが大声で「おっかちゃん、おっかちゃん！」と泣き叫び、私たちもワーワーと大声を出して騒ぎました。「早く電気をつけなさい！」と私はどなりました。そのとたんパッと電気がつき、引きずり

出された山川のおばさんは顔をしわくちゃにして、一本しか残っていなかった前歯をむき出しにして大声で泣きました。その顔を見たソ連兵は、引っ張っていた両手をポイと投げ捨てるように放し、何もせずに出ていきました。強欲なソ連兵も、おばさんの表情を見てびっくりしたのだろうと、後でみんなで大笑いをしました。おばさんもやっと生気を取り戻して「みなはんに、ほんまに心配かけてすまなんだなあ、ありがとうさん」と謝っていました。

その次の晩も、ソ連兵は相変わらずやって来て、四人の子供が掛けて寝る毛布と、大事にしていた毛皮の外套をとっていきました。新京の駅で長女の下着や着替えをとられ、今度は子供の毛布などを持っていかれてしまい、もう何もとられるようなものはないと居直ったような気持ちになりました。しかし負けてはおれない、あしたはあしたの風が吹くということで、その夜はお互いに抱き合い、温め合いながら寝ました。

翌日、和田さんと二人で、機関庫の近くに客車が転がっているので何かあるだろうと行ってみました。ほ

こりやごみで汚れた長い腰掛けが幾つかあったので、二人は大喜びでその腰掛けを苦勞して分解しました。外側はビロードのような布で覆っており、中には細いカンナクズがいっぱい詰まっている物で、予想外の収穫で喜び勇んで持って帰りました。大きな敷布団を作って、みんな暖かく寝ることができました。

開拓団の団服は防寒用にできていたので、八月に晨明を出発するときに、これからの冬に向かつての避難行に備えてみんな着てきたので、寒くなってきたも本当に助かり、よかったとつくづく思っていました。

九月半ば過ぎのところだったと思いますが、開拓団の家族四、五人で、もしや、だれか知っている人が新京に来ていないかどうかと新京日本会の事務所に行きに行きました。そこで偶然に、五月に召集されて八面通の部隊に行っていた、井上隆さんに会うことができました。井上さんも、同じく晨明樺陽の人たちを捜しに日本人会を訪ねてきたとのことでした。

樺陽開拓団の人たちも、私たちと同じ満鉄社宅にいたので、「みんなが待っているから、満鉄社宅に早く

行きましょう」と言ったところ、井上さんは「五人の戦友と一緒にここまで逃げてきたので挨拶もしなければならず、荷物も少しあるのでそれも持ってくるから待っていてくれ」とのことで、日本人会で待っていました。しばらくして一人で来られたので、すぐに満鉄社宅に連れて行きました。幹部の集まっている部屋に案内し、団長や先生たちといろいろと話をされていました。

団長から全員の集合が指示されて集まり、そこで団長が「これからの冬を、何とか乗り越すには共同生活をやるほかには方法がない」という話があり、井上さんも今までの経験を話されて、これからの共同生活のやり方を説明されました。

それから新京機関区に団長と井上さんが行き、これからの仕事のことについて交渉をしたそうです。その結果、働ける者は全員機関区で働かせてもらえることになり、給料も支給することでした。そのうえに、毎日仕事の帰りには少しずつですが、石炭をもらって帰れるようになりました。みんな非常に喜び、元

気が出てきたような気がしました。

そのおかげで毎日炊事もできるようになり、暖もとれて、あの零下二十度、三十度という寒い冬を、凍死などの死者もなく無事に過ごすことができたのです。

機関区に通う往復の道には、だれだか分からない死骸が、数えきれないほど横たわっていました。寒さと飢えで死んだ人たちです。

十月末ごろのある日の夕方、私が炊事の支度をしていると、芳子が首に掛けた笛を「ピーピー」と吹いて私を呼びました。芳子は声が出なくなっていたので、笛でいろいろと合図をしていたのです。

「なに、芳ちゃん、おしっこ？」と聞くと、芳子は私を見て首を振り、両手を出して、抱っこしてもらいたいというしぐさをしました。やせて軽くなった芳子を抱き上げると喜んで「おっぱいが飲みたい」と言いました。ああ、もう駄目なんだなあと思い「はい、おっぱいよ」と乳房を出し芳子の口にくわえさせたところ、芳子は赤ちゃんのような顔をして私を見つめ、一生懸命に吸いました。「甘くておいしかったよ」と言

って満足そうな顔をしました。思い出したように、小さな手で私の顔をなでながら、「お母さん、かわいいね」と言います。さらに、「芳ちゃんね、お花がたくさん咲いている遠い所へ行くのよ」と言うので、「そう、お花のある所には何を着て行くかね」と聞くと、「先生から頂いた赤い足袋と花模様の赤い着物があつたよねー、芳ちゃんね、あれ着て行くのよ」と言いました。「そんなに良い所ならば、お母さんも連れていってちょうだい！」「だめ、芳ちゃん一人で行くのよ」芳子の小さな頭の中を靈感のようなものが去来したのでしょうか？「赤い花模様を着物を着て、赤い足袋を履いて行くの、とってもかわいいよね。そんなにきれいな所ならばお母さんも一緒に行ききたいなあ」「だめ、だめ。芳ちゃん一人で行くのよ」と言いました。

四歳のまだほんとうに頑是無い子供でしたが、何でも分かっているようなことを言っていると、胸が痛くなり涙が止まりませんでした。実に残酷なハシカでした。八、九歳以下の子供たちは苦しみながら、みんな四、

五日で死んでいったのです。

芳子も二、三日は苦しそうでしたが、昔、母から「ハシカには犀の角を鮫の皮でおろして飲ませるとよい」ということを聞いていたので、主人の印鑑が犀の角でできていたので、鮫の皮の代わりに、爪切りのやりすりでおろして飲ませました。そのせいかどうかわかりませんが、あまり苦しみもせず十日も生きていてくれたのです。悪性のハシカで、目は片一方がつぶれ、唇は半分腐れおちて声も出なくなっていました。本当に芳子は哀れな顔になっていました。赤い夕日が窓を染めるころに、私に抱かれたまま芳子は死んでいきました。もう一方の目がつぶれなかったことが、せめてもの慰めでした。あまりに哀れな姿で死んだ芳子がかわいそうで、朝まで抱いていました。

花模様の赤い着物を着て、赤い足袋を履いて、お花のたくさん咲いている遠い所に行ってしまったんだなと思い、芳子がかわいい姿で花の中をどんとどんと歩いている姿を想像していました。

苦しうて哀しうて悲惨だった避難生活の中でも、こ

のことが一番悲しくつらい出来事でした。今も時々、夢の中に赤い着物を着て、赤い足袋を履いて、花が咲き乱れている野原で私を手招きする芳子が出てきます。はっとして目が覚めて、涙が出てそれからは再び眠ることができなくなります。

昭和二十年の暮れから春にかけて疫病が流行しました。避難生活の中で、私たちのために随分と骨を折って働いた団長も先生も、発疹チフスにかかり相次いで亡くなられました。二人の指導者を失って、精神的に混乱してしまった私たちは、相談の結果、井上さんに隣組長になってもらうことをお願いし、ようやく引き受けてもらいました。

五 待望の引揚げ帰国

満鉄社宅の避難者たちは、栄養失調で苦しみながらも、何とか生きて日本に帰りたい一心から、新京での寒く長い冬を耐えしのぎました。

昭和二十一年の六月ごろになると、新京地区の避難者の引揚げのうわさが、この満鉄社宅にも入ってきて活気がでてきました。今日か、明日かという気持ちの

うちに日がたつてきて七月になりました。

七月になると、そのうわさが本当になりました。新京避難中に亡くなった人々は、全員火葬にして各遺族に渡されました。芳子も小さな入れ物に入り、それを大切に私の身につけました。重病人は残留させるという指示でしたが、井上さんたちの努力で全員連れて行くことになり、一人の残留者も出さずに満鉄社宅を後にすることとなりました。

昭和二十一年七月二十日朝、千早町を出発して、午前十時に南新京駅から汽車に乗り、壺蘆島に向かいました。

七月二十五日、壺蘆島から引揚船の「YO十二号」に乗船。途中いろいろな事もありましたが、日本に帰れるという喜びで胸がいっぱいでした。

七月三十日、無事に舞鶴港に上陸し、帰国手続き、検疫などのため数日、引揚宿舎に入り、約八十人の隣組員の解散式を行い、再会を約束して、それぞれの故郷に向かって別れました。

それから五十数年が過ぎましたが、遠い昔のことの

ようでもあり、ついこの間のことのようにもありません。

でも悲しい出来事であったことには変わりません。

芳子をはじめ、あの満州で非業の死を遂げた方々のご冥福をお祈りするのみです。

満州引揚げの記

千葉県 田村 みを

一 生い立ち

私は、福島県耶麻郡猪苗代町字渋谷村において、父穴沢清助、母ミサオの九人の子供の三女として、大正六年十一月二十三日に生まれました。家は会津磐梯山のふもとにある農家でした。

当時、小学校は四年生までが村の分校に通い、五年生になってからは猪苗代町の本校に行くことになっており、約四キロメートルの道のりを四年間通学しました。そこで尋常高等小学校の課程を終了し卒業しまし